

研究紀要

第33号

大木戸遺跡出土飾弓の装飾部の材料および製作方法について

原 由宇稀
金子 直行
阿部 芳郎
宮腰 哲雄
本多 貴之

加須市長竹遺跡における製塩痕跡の分析

阿部 芳郎
吉田 稔

古墳時代前期の比企地域（1）

福田 聖
青木 弘

—東松山市反町遺跡周辺を中心として—

武藏国からみた黒色土器の消長と展開

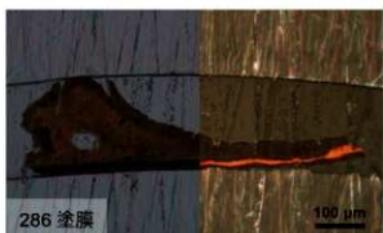
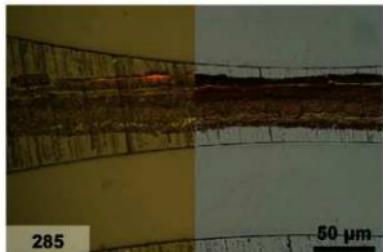
渡邊理伊知

中近世利根川中流域における角閃石安山岩転石の利用に関する基礎的研究（1）

水村 雄功
久永 雅宏

2019

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

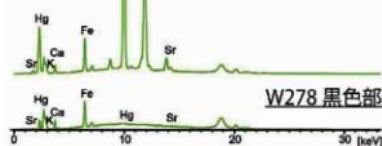
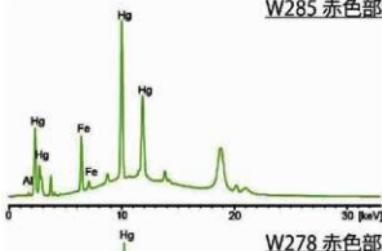


(左：反射光、右：透過光)

第6図 飾弓のクロスセクション画像

(金子他 大木戸遺跡出土飾弓の装飾部の材料および製作方法について)

W285 赤色部

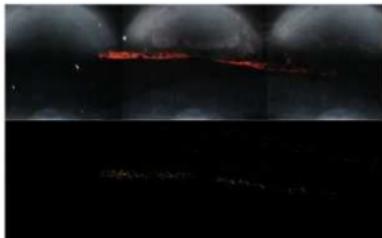


第7図 飾弓のED-XRFによるスペクトル



W285 (上：光学像、下：元素マッピング画像)

赤：水銀、緑：硫黄



W278 (上：光学像、下：元素マッピング画像)

赤：水銀、緑：硫黄

第8図 ED-XRFによるマッピング画像

目 次

巻頭図版

序

- 大木戸遺跡出土飾弓の装飾部の材料および製作方法について 原 由宇稀・金子直行・阿部芳郎・宮腰哲雄・本多貴之 (1)
- 加須市長竹遺跡における製塩痕跡の分析 阿部芳郎・吉田 稔 (13)
- 古墳時代前期の比企地域 (1) 福田 聖・青木 弘 (25)
—東松山市反町遺跡周辺を中心として—
- 武藏国からみた黒色土器の消長と展開 渡邊理伊知 (51)
- 中近世利根川中流域における角閃石安山岩転石の利用に関する基礎的研究 (1)
..... 水村雄功・久永雅宏 (79)

古墳時代前期の比企地域（1） —東松山市反町遺跡周辺を中心として—

福田 聖 青木 弘

要旨 埼玉県内では比企地域を中心に、古墳時代前期後半に土器型式の転換と前方後方墳から前方後円墳への転換という、大きく二つの側面の画期が認められる。本稿ではその画期の内容と意義について、東松山市反町遺跡を中心に検討した。2～4では、比企地域における反町II～2期後半の型式論的画期とその前後における土器群の変遷、反町・五領両遺跡における外来系土器の相似、相違の様相といった土器に見られる特徴的な様相を検討した。5ではII-2・II-3期における集落の様相を整理し、II-2期における集落の拡大と集中、II-3期における限られた集落への集中と、小規模集落の拡散を確認した。6では墳墓について検討した。II-2期における同一墓群内に前方後方墳から前方後円墳への変遷が確認される諏訪山古墳群の様相は、今後、他地域と比較していくうえでも重要である。また、II-3期においては大型前方後円墳の野本將軍塚古墳、振文鏡が出土した高坂8号墳が築造されるが、その系列がその後途絶える点を確認した。このように比企地域を中心とする北武藏ではII-2期後半に土器型式の画期が認められ、II-3期にはそれに基づいて土器群全体の様相が転換するとともに、前方後円墳が展開するようになる。この土器の画期と前方後円墳への転換、その後の途絶という対応関係は、一重に東松山に留まらない北武藏における一つの形と考えられる。

1 はじめに

関東地方の古墳時代前期は、古墳の造営という初頭における大きな変革とともに、後半にも大きな画期が認められる。その表れの一つは土器の型式論的な画期であり、もう一つは前方後方墳から前方後円墳への転換である。

この画期は埼玉県内でも特に比企地域に、土器では東松山市反町遺跡と五領遺跡での様相に、墳墓では諏訪山古墳群・高坂古墳群・野本將軍塚古墳等の造営を巡って明瞭な形で認められる。

本稿では比企地域を中心に、この画期とその意義について明らかにしようとするものである。

2 土器について

（1）土器の時期区分

反町遺跡、五領遺跡を含む比企地域の古墳時代前期の土器群については、吉ヶ谷式から所謂「五

領式」、南関東的な土器型式へのドラスティックな変化が起こったものとして、東海西部系土器群を大幅に受け入れて変容した群馬県南部の土器群と並んでよく知られている。筆者は、表面的な大きな変化と並んで土器製作における手法については吉ヶ谷式から継続的であると考えているが、この問題については「五領式」土器の再設定の根幹にかかる部分と考えている。現段階では準備不足であり、今回の問題とは直接関係しないため次稿で論ずることとする。

さて、筆者は弥生時代後期から古墳時代前期の土器群について、甕類の型式変化を軸に時期区分を行ってきた。比企地域については反町遺跡の報告書中で、古墳時代前期の土器群を3期に区分した（赤熊・福田2010）。

埼玉県は広く、北部、東部、西部、大宮台地、低地部と小地域ごとに異同があるが、各所の土器

群について検討を重ねてきた結果、大きな段階区分としてはこの3期が有効と考えている。古墳時代前期の土器群の全体像については次稿に譲る。

ここでは、本稿で問題とする画期を含む反町II-2・3期（以下では2・3期と表記）について、比企における該期の大集落である反町遺跡、五領遺跡（黒沢2004、石坂2005）の資料を軸に見ていきたい（第1図・第2図）。

2期は反町遺跡第234・248・295号住居跡、五領遺跡A区13・31・B区46号住居跡等が該当する。なお、本稿から後半に3期との画期が含まれるものとして、前半、後半に2分する。

2期は壺と甕類の球形胴化が完成する時期で、北武藏では所謂小型丸底壺が器種として一般化する。これまで何度も指摘されているように、北武藏では周辺地域に比して一段階遅れて一般化するとされている（石坂ほか1984）。

一概には言えないが、壺・甕類は口縁部の粘土の積み上げが2～3段と長く、頸部の縮まりが強く、球形胴のみの器形が一般的である前半と、口縁部の積み上げが1～2段と短く、頸部の縮りが弱くなり、胴部に長胴化傾向が目立つ後半に分けられる。台付甕の脚台部は、前半は大小が見られるが、後半には小型のものが一般的である。

広口壺や小型壺の器形も、壺・台付甕類と同様である。

高坏、器台類の組成自体は1期から変わらないが、ごく少ながら中空柱状脚高坏、所謂屈折脚高坏が見られる。大部分は1期から継続する東海系高坏が主体である。坏部、器受部の高さに比して脚部の高さが高くなり、裾部の径が広くなる。後半では裾部が更に外反して大きく広がるものが多い。

3期は反町遺跡196・229・230・251号住居跡、五領遺跡B区47号住居跡、代正寺市15号住居跡、事業団17・24・34・51・58・59・61・63・

85号住居跡などが該当する。

壺・甕類は球形を基本とするが長胴化が進む。球形胴の例も頸部の括れが弱い。甕類の口縁部は1段の例が多く、強いヨコナデが目立つ。調整にも簡略化が認められ、ヘラケズリ、あるいはそれに近いヘラナデがそのまま認められる例も多い。

小型丸底器は脚部の径、大きさとも、その比率が大きくなり、やはり頸部の括れが弱くなる新しい時期には全体がヘラナデのみによって仕上げられる例も散見される。

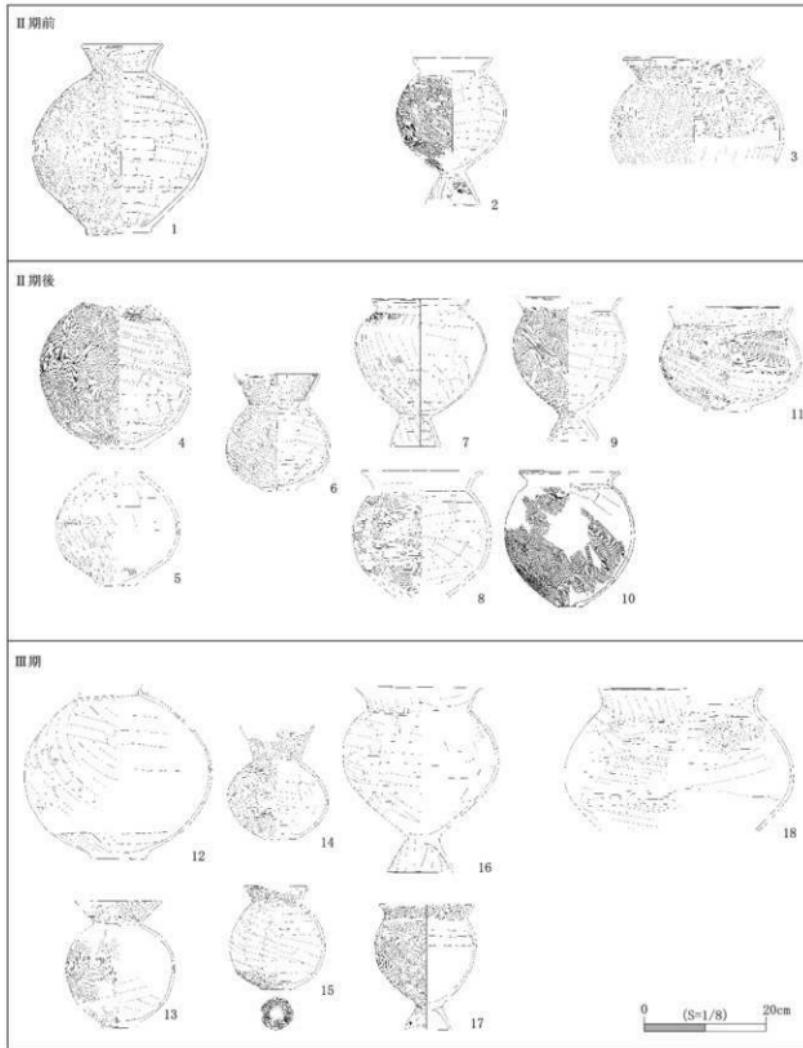
高坏、器台類は新たな特徴的な器種が主要となる。高坏は前段階で萌芽的に認められた屈折脚高坏、書上元博が提唱した「下加南型高坏」が主体となっていく（書上1991）。2期まで主体だった東海系高坏は、継続して認められるが減少する。器高が高くなり、脚部は端部のみが更に外側に開くものが認められる。東海系器台の変化も同様である。屈折脚高坏同様に、2期に一部認められた畿内系の「X字形」器台が主流となっていく。

型式論的な観点から鍵となるのは、壺・甕類の頸部の括れ具合、口縁部と胴部のバランス、胴部の形態にあると考えられる。加えて、特徴的な器種である屈折脚高坏、X字形器台の一般化があげられる。土器の型式論的変化、組成の変化という点からすれば、2期と3期の間に画期を求めることが可能である。

（2）2期後半の画期について

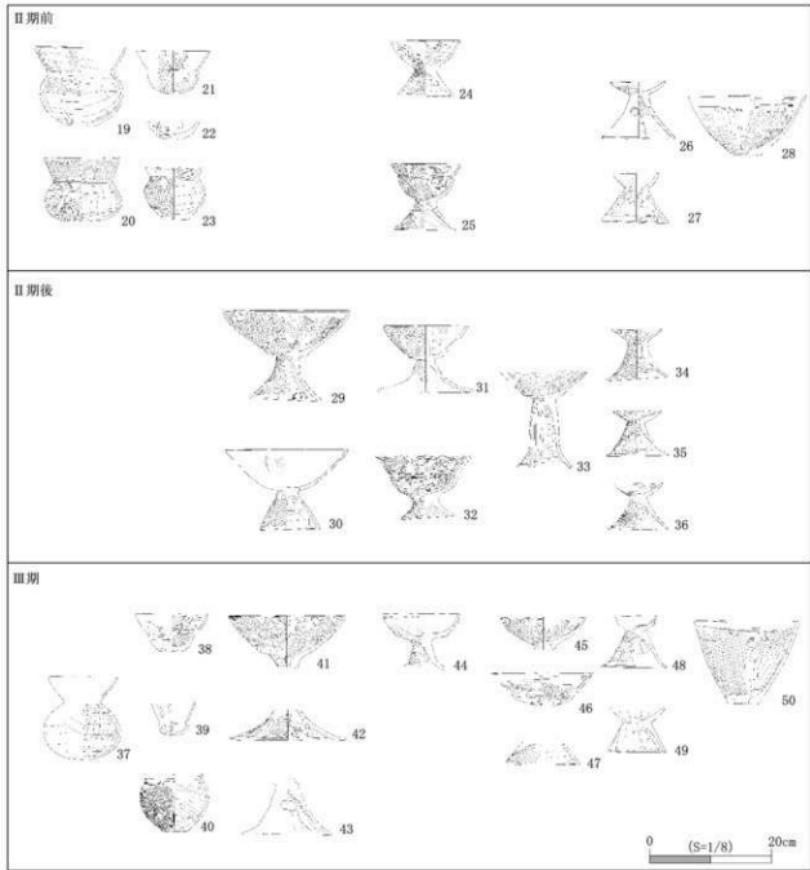
上述のように、2期と3期の間に型式論的な画期を求める考え方があるが、関東地方では広く共有されている。しかし、田嶋明人はこの画期の求め方を問題視している。

田嶋は、赤塚次郎がこの高坏の一般化をもって松河戸式とする画期の捉え方（赤塚1994）について批判する（田嶋2009）。既にこの「屈折脚高坏」が廻間Ⅲ式段階に西日本全体では一般化しており、それが東海西部では遅れただけであるとして、赤塚の松河戸I-1期、加納俊介の西北



1 : SJ60 2・3 : SJ190 4～6・9・11 : SJ180 10 : SJ218 7・8 : SJ214 12 : SJ230 13・15～18 : SJ196 14 : SJ229

第1図 反町遺跡出土土器の時期区分（1）（福田・青木 2018 より転載）



19 ~ 24・27・28 : SJ190 25 : SJ241 26 : SJ60 29・31・32 : SJ218 30 : SJ278 33 : SJ276 34 ~ 36 : SJ214

37・40・42・46 ~ 49・50 : SJ196 38・45 : SJ230 39 : SJ231 41 : SJ148 43 : SJ137 44 : SJ283

第2図 反町遺跡出土土器の時期区分（2）（福田・青木 2018 より転載）

出期に画期を求めている。

筆者も、これまでこの「下加南型高壺」の一般化が2・3期を画しており、画期と考えていたが、前述のように2期には既に組成に含まれており、田嶋の指摘は首肯しうる。それは、畿内系のX字形器台についても同様で、やはり2期に組成

に加わっている。

ここで改めて反町遺跡出土土器について点検すると、時期区分の作業の当初から2~3期の移行期と捉えられる土器群が多いことに思い至った。反町遺跡では、第180・214・218号住居跡出土資料などが該当する。2期までに達成され

た球形胴が残りつつも長胴化の傾向が強まり、調整の粗略化が進行する。この段階が、田嶋の言う画期の土器群に該当するものとも考えられる。田嶋の位置づけに沿うならば、漆町9群に相当する（田嶋1986）。

ただし比企地域を始めとする埼玉県域で「下加南型高坏」が一般化するのは、東海地方同様にやや遅れると考えられ、分かりやすい指標であることは間違いない。「下加南型高坏」が一般的に組成に含まれる段階を3期とすると、先の画期は2期の後半となる。

また、田嶋は大村直、加藤修司の草刈式（大村2006・2009、加藤2000・2004）と漆町編年との対比も行っている。そこでは、やはり屈折脚高坏を指標とする大村らの草刈3-1式の設定に対して、赤塚の編年と同様の理由で草刈2式後半に漆町9群に並行する画期を求めている。

筆者らの田嶋の所見に対する理解が妥当であるならば、やはり2期後半に画期を求めるのが適当であろう。

以上のように、これまでにも2期を漆町8・9期としてきたが、本稿でもそれを継続することが妥当と考えられる。次の時期区分である3期は、漆町10群以降となる。また前述の松河戸I式の捉え方から、2期後半を松河戸I-1式に並行するものとする。

本稿では前述の手続きにより2期前半を姫間Ⅲ式、漆町8群、2期後半を松河戸I式1段階、漆町9群、3期を松河戸I式後半～II式、漆町10・11群とする。

（3）他氏の編年との関係

古墳時代前期の埼玉県を中心とした土器群については、筆者以外の多くの研究者が位置づけを行っている。必ずしも筆者の編年観と一致しているわけではないが、詳細は別に譲り、対応関係を示す。埼玉県域における小坂延仁の編年とは、小坂II・III期が本稿2期前半、小坂IV期が

本稿2期後半、小坂V期が本稿3期に当たる（小坂2014）、群馬県域における若狭徹・深澤敦仁の編年とは、両氏の古墳時代前期中段階が本稿2期、両氏新段階が本稿3期に当たる（若狭・深澤2005）、東京都・神奈川県域における古谷紀之の編年とは、7・8期が本稿2期、9・10期が本稿3期に当たる（古谷2014）。前述した千葉県域における大村直の編年とは草刈2式後半が本稿2期後半、草刈3期が本稿3期に当たる。

なお、1・2期の枠組みや、中期との接点については冒頭に述べたように、次稿で改めて論ずることにしたい。

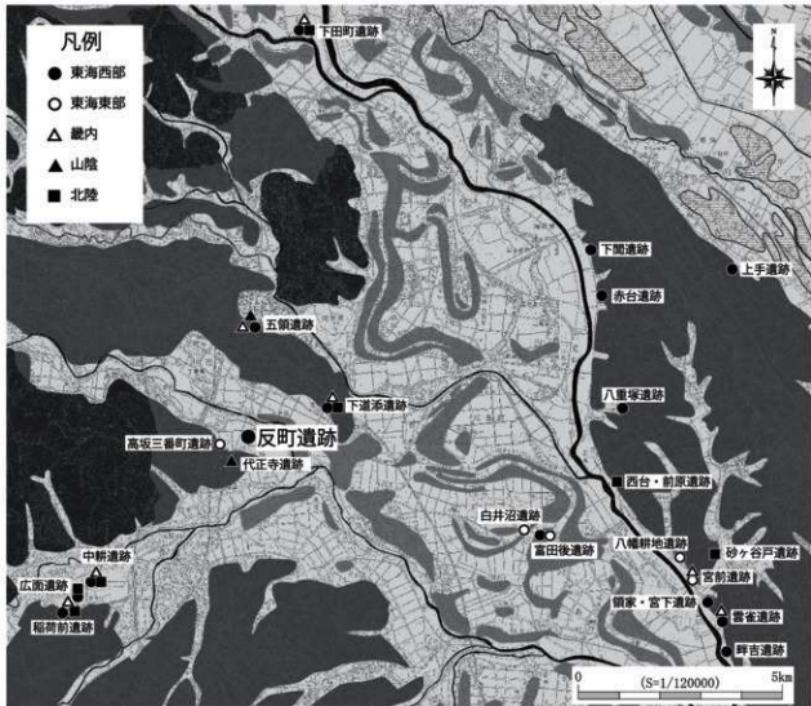
この他に比企地域については、坂野和信の下道添遺跡の報告書作成を基礎とした研究がある（坂野1987）。その中では各期の型式論的特徴について詳論はされていないが、編年図にみる細分は筆者の考える型式論的变化の捉え方とは異なる。その異動については別に述べることとする。

3 外来系土器の様相

比企の土器群には、2・3期を中心に、五領遺跡の調査当初から多様な地域からの外来系土器の存在が知られている。東海地方東部系、西部系、北陸系、畿内系、山陰系、常陸などの隣接周辺域からの系統も認められるなど、この時期の外来系土器が網羅されている感がある（第3図）。

他地域に系譜を引く土器群については、他の地の土器そのものが搬入された「外来土器」、在地で作られた他地域の土器を模倣した「外来系土器」に区分されている。

東海東部 県内でみられる他地域系統の土器は、まず間違いなく後者であるが、東松山市高坂三番町遺跡から出土した外来土器、完形の駿河の大廓式の超大型壺が北條芳隆によって、三角縁神獣鏡シンボで大きく取り上げられた（北條2015）。しかし、未報告であるため、伴出する土器群との関係は不明である。また古くから知られる例とし



第3図 反町遺跡周辺における外来系土器の分布傾向

て、諏訪山29号墳の例（坂本ほか1986）がある他、川島町白井沼遺跡（栗岡2007）、富田後遺跡（鈴木2011）からも搬入品の口縁部が出土している。

東京都・埼玉県の大廓式の検討は、栗岡潤によってなされている（栗岡2011）。その中で栗岡は、諏訪山29号墳の大廓式大型壺の口縁について、渡井英吾のⅢ期（渡井1998）に当たるものとしている。他の伴出遺物から筆者らは同古墳の出土遺物を2期と考えており、栗岡の比定をもとにすれば、2期は大廓Ⅲ期となる。白井沼、富田後の伴出土器も2期に帰属すると考えられ、比企地域に大廓式の超大型壺か外来土器としてもたら

されるのは2期と考えられる。

諏訪山29号、反町、高坂三番町の大廓式超大型壺も大廓Ⅲ式と考えられる。

栗岡や駿河以東の大廓式超大型壺を検討した柳沼賢治が指摘する特殊性は、関東地方における外来土器全体の当時の社会における意義を示す可能性があると考えられる。詳しくは、後述したい。

それに加えて、反町遺跡からは硬質で厚手の掛川市周辺地域の搬入品が見られる。

東海西部 外来系土器の中で最も一般的なのは東海西部系の土器群である。その型式論的範疇の把握は、S字縫の形態から導かれる。多くの場で赤塚次郎が説くように、早くから関東地方に及んで

いたS字縁は使用される在地における変容が著しい。それでも全体の器形は故地と共通し、反町遺跡の2期の例は肩部の張りが大きく、全体が長胴気味で脚台部が小さい（第4図）。廻間Ⅲ式3～4段階に対応する。編年的な対応関係は前述したが、松河戸I式に対応する2期後半においてもS字縁が多く見られる点は、群馬県域との様相の兼ね合いからも興味深い。白井沼や富田後など荒川低地の遺跡においても同様の展開が認められる。

このほかに、反町、五領の両遺跡からは二重口縁壺が出土している。関東地方の二重口縁壺を検討した土井祥平の分類に従えば、「伊勢型」、「荒砥型」、「折衷型」が認められる（土井2014・2015）。図示した五領遺跡の第8図27は、口縁部が直線的に大きく開き、頸部の括れが強く、単体としては2期に帰属すると考えられる。土井のA系列手法に当たる。五領遺跡A区1号住居跡の一括性には疑問が呈されているが（黒沢2004）、3期の可能性も考えておきたい。

畿内系土器 畿内系土器については、既に何度か触れているが、伴出土器から多くが2・3期とすることができる（第5図）。

よく知られているように五領遺跡からは多くの布留系土器が、反町遺跡からはタタキ縁が出土している。

反町遺跡のタタキ縁は第5図78～81に示した。いずれも長胴を呈すると考えられる。この時期にタタキ縁が残るのは畿内では山城のみで、同地域のタタキ縁も長胴であることから、その系統を引く可能性が高い（吹田2006）。

布留縁は口縁部が内湾し、端部の処理が不明瞭なものがほとんどで、新しい様相と考えられる。第8図1・2がやや玉縁状で、やや古相を示すともいえようか。

五領遺跡の直口縁壺は口縁部が長く多段の粘土積み上げが見られ長胴化している。特徴であるべ

き端部の処理も不明瞭で、第8図19は若干摘み上げられているのみである。器形からは古くすることはできない。

小型丸底土器は在地化しているものとの判別が難しい。どこまでを外来系とできるかは判然としない。その中で第8図9～11は横磨きが密に施され、非常に軽い。

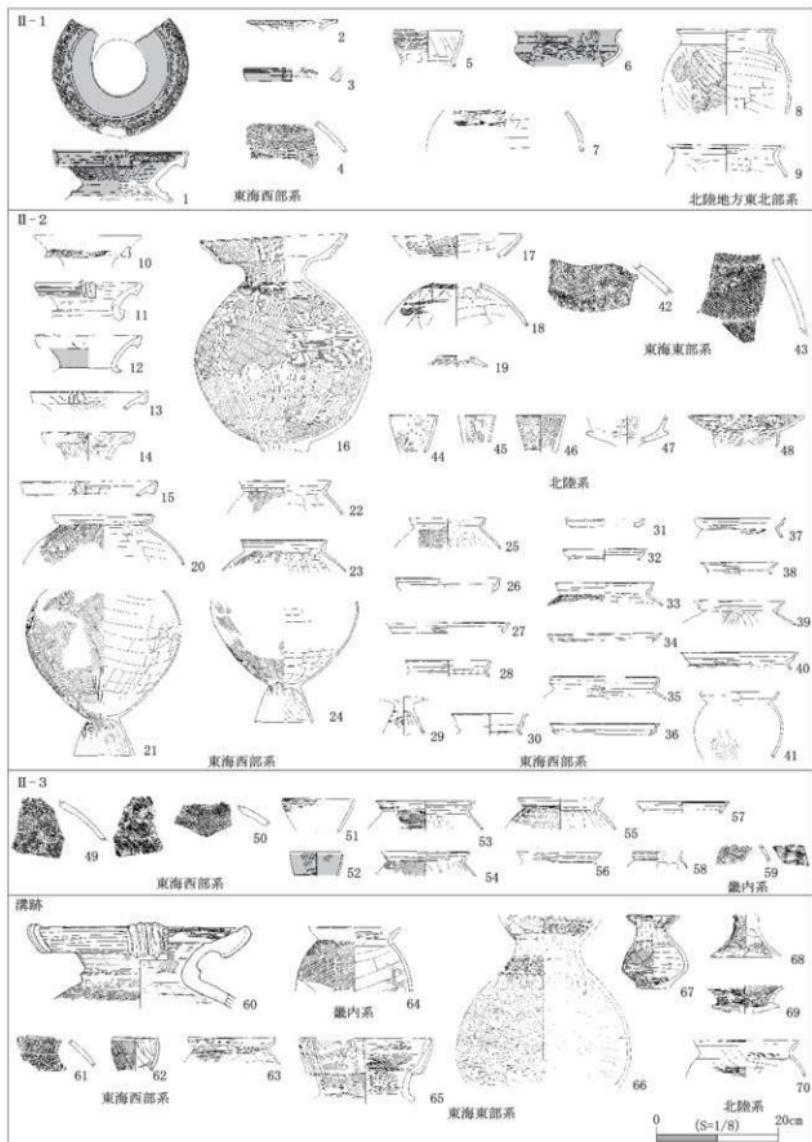
有段口縁、屈折口縁などと称される鉢は、立花実の検討（立花1992）にあるように、深めで口縁と体部の区分が明瞭なものから、浅めで不明瞭なものへと変化する。

これらの様相から、五領遺跡の畿内系土器は、青木勘時の大和様相VI（青木2006）や、杉本厚典の河内28～30期（杉本2006）、西村歩・池峯龍彦の布留2式（西村・池峯2006）に相当すると考えられる。

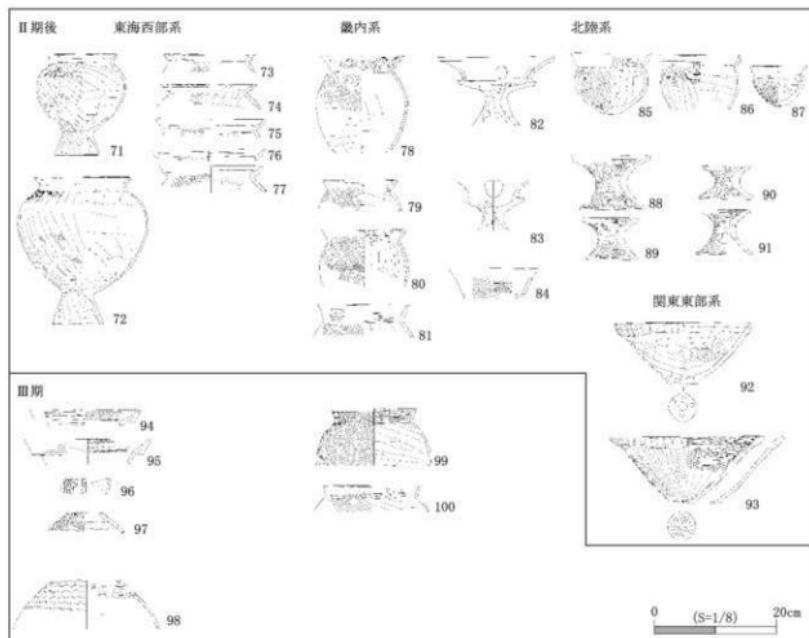
細かな位置づけまでは困難だが、田嶋は先の検討で漆町9群を西村の布留式中段階中相（西村2008）に当てており、2期後半が並行すると考えられる。

北陸地方 北陸系土器には、故地での在来系である所謂5の字状口縁壺は、埼玉県域ではほぼ通常サイズの縁としては認められず、小型の鉢類が認められるのみである。その中で注目されるのが、土師式土器集成に示された壺である（第8図30）。直接の対比は伴出資料がなく確実ではないが、その口縁部の形態から漆町9群に位置づけるのが無理のないところと考えられる。

縁類は千種縁が一定程度認められる。外反する口縁部、上端が突出して直立し、外側に面を持つように仕上げられる端部が特徴である。肩部から上位のものがほとんどだが、第1図10は全体が知られる個体である。平底で無花果形に近い器形で、全体が刷毛目で仕上げられている。故地のものがヘラナデやヘラケズリによる薄縁としての志向を持つものとは異なり、北陸全体でみられる刷毛目平底縁を想起させる調整である。頸部の括れ



第4図 反町遺跡の外来系土器 (1) (福田 2012 より転載)



1 : SJ336 2・6 : SJ324 3～5・7～9 : SJ9 10 : SR7 11 : SJ48 12 : SJ341 13 : SJ335 14 : SJ55 15 : SJ344 16・41 : SJ57 17 : SJ39
 18・35・36 : SJ334 19・33・34・46～48 : SJ332 20～28 : SJ323 29 : SJ328 30 : SJ326 31・32・44・45 : SJ317 37 : SJ341 38 : SJ349
 39 : SJ48 40 : SJ41 42 : SJ19 43 : SJ60 49 : SJ319 50・57 : SJ320 51 : SJ175 52 : SJ319 53～55 : SJ44 56・58 : SJ56 59 : SJ73
 60・62・63・66・67・69 : SD48 61・70 : SD117 64・65・68 : SD36 71・72 : SJ214 73 : SJ271 74 : SJ267 75・97 : SJ247 76 : SJ308
 77・79～81 : SJ295 78 : SJ273 82・93 : SJ206 83 : SJ185 84 : SJ241 85～89 : SJ234 90・91 : SJ215 92 : SJ179 94 : SJ182 95 : SJ268
 96 : SJ182 98 : SJ230 99 : SJ254 100 : SJ256

第5図 反町遺跡の外来系土器(2)(福田・青木2018より転載)

が弱く、口縁と胸部最大径が同一で、器形的には2期後半に該当する。漆町9群か。

5の字状を呈する鉢は、いずれも234号住居跡出土のものである(第5図85～87)。234号住居跡からは、坂本が指摘するように北陸系土器がまとまって出土している(第6図)。これらは球形の体部を意識しつつも、頸部の括れが緩く、2期後半の様相を示す。

合わせて、口縁と脚部がほぼ同大の器台も同住居跡からの出土である(第5図88～90)。筆者は、

当初この器台を丹後半島に由来するものと考えたが、それにとどまらず北陸西部全体で認められるものであると多くの方からご指摘いただいた。北陸西部系と認識を改めたい。伴出資料から2期後半に帰属すると考えられる。

また、特徴的な器種である装飾器台、有稜高杯、小型鉢も認められる。装飾器台の模倣である大型器台は故地との隔たりが大きく、古くに諸里知義らが指摘したように、在来土器の枠組みの中で型式論的変化が捉えられる(諸里1986)。2期後

半を中心とする。

以上のように、北陸系土器は2期後半を中心認められると考えて良いだろう。

山陰系土器については、低脚环、鼓形器台といった特徴的な器種が見られる

鼓形器台、低脚环は特徴的な形態ではあるが、模倣程度は良くなく、故地のものに見られるようなシャープさを欠いている。低脚环は松山智弘の小谷2式、高橋浩二の古墳4期までとされており、形態からもその時期と考えていゝだろう。前述のように、鼓形器台が帰属するとされるA-1号住居跡の一括性については疑問が呈されており、低脚环同様に小谷2式期にはほぼ終焉を迎えるとされており、口縁部の外反が弱く、直線的な点をとり、その時期に置いておきたい。

山陰地方の土器群との並行関係は、高橋の整理によれば漆町9群が小谷2式、高橋の古墳4期とされているため、これらを2期後半に並行するものと考えたい。

また、これらの山陰系土器は、五領遺跡の布留模倣の土器と同様の粘土が用いられており、注目される。

以上のように、2期、3期の反町、五領両遺跡の外来系土器と他地域との比較を行い、併行関係が整理できた。本来1期からの継続の中での評価が必要だが、本項では2・3期を対象とするため、両期における東海、畿内、北陸との色濃い関係を確認するに留めたい。

特に前述の画期の可能性がある、2期後半に多く認められる傾向がある点は留意すべきだろう。

また、これまで外来系土器については、東海系、畿内系が注目されたことが多かったが、埼玉県内については小坂延仁が指摘するように、比企地域でも北陸系土器の色合いが強く感じられる（小坂2009）。

かつて羽生市屋敷裏遺跡の土器を巡って、北陸系土器が2・3期においても継続的に展開し、そ

れに加えて山陰系土器が見られる点について指摘した（福田2017）。

その際に、既に2期当初から大型前方後円墳が造られる群馬県域では北陸系土器が見られなくなる様相と対照的であるとした。それは比企地域においても同様である。

反町遺跡では、緑色凝灰岩、水晶製玉作りの工房の存在が注目を集めている。技術系譜については確定が困難とされているが（赤熊2018）、仮に北陸からの系譜を意識するのであれば、玉作り工房である第48・56号住居跡（第6図）が帰属する2期後半から3期にかけての時期が、北陸系土器が中心的に認められる時期と重なる点は大いに示唆的である。

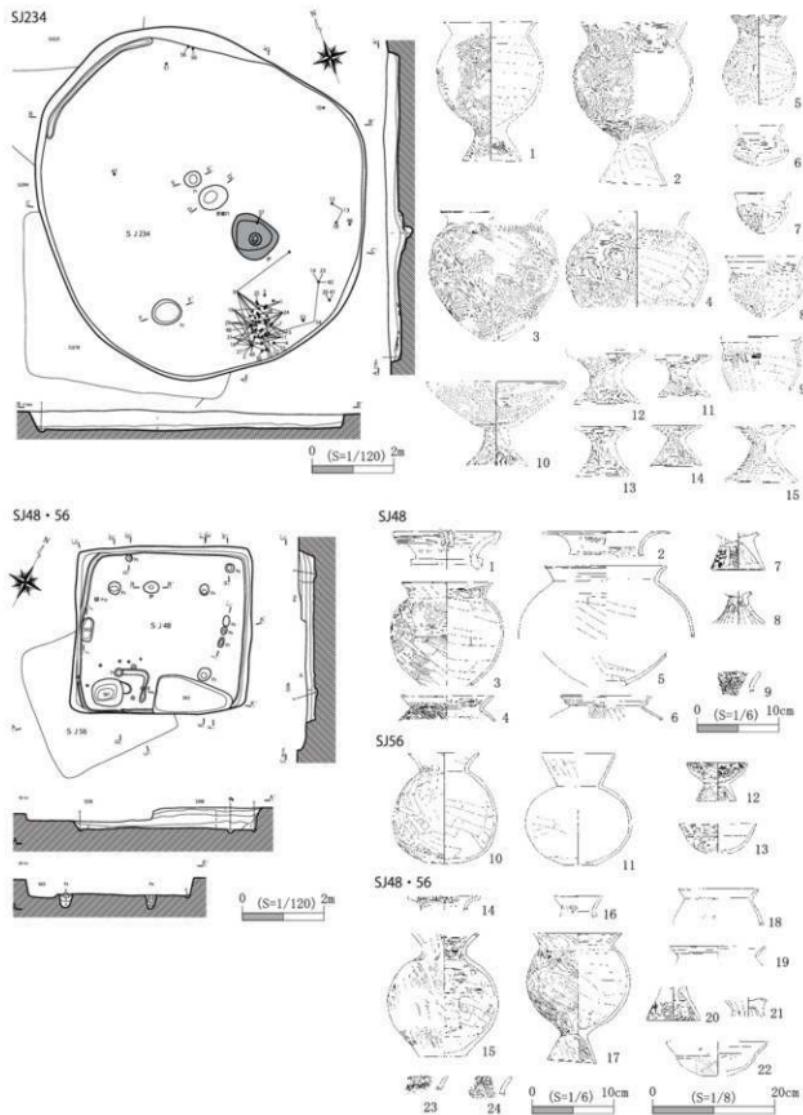
こうした外来系土器、外来土器に見られる他地域との複雑な関係性を保つことができる社会の到来が、大型前方後円墳造立の背景となるのは異論のないところであろう。それは関東各地でも同様である。

ただし、土器から見た場合、それを構築する社会の様相は各々で大分異なる。比企には、比企の方法があると考えられる。

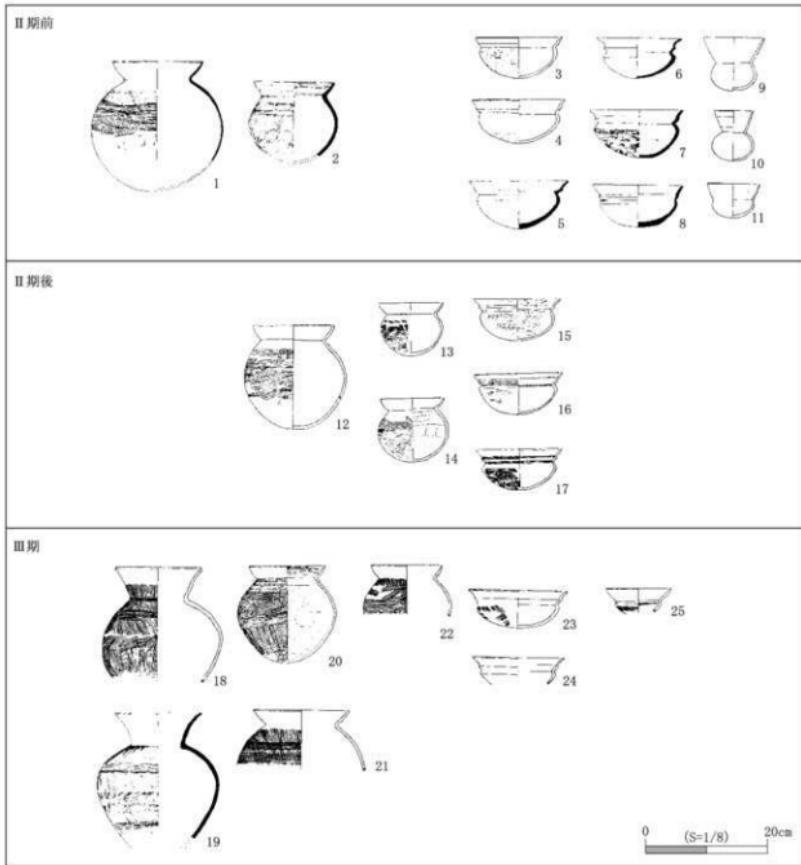
4 外来系土器の模倣について

よく知られているように、東海西部系土器は汎関東的な影響が古墳時代初頭まで見られる。比企地域では、他に東海東部系、北陸地方西部、東部系、山城系と考えられるタタキ甕、それに続く布留甕に加えて、山陰系のようなあまり一般的ではないものも含め、関東地方で見られるほぼすべての外来系土器が見られるのが特徴である。

その中で、彼の地の製作手法を強く意識しているのは、何といっても薄甕として特異な製作手法を持つS字甕であろう。特に際立っているのは、胴部の薄さと脚台部の接合方法である。反町遺跡をはじめとする埼玉県域の低地部における接合方法は、それをほぼそのまま踏襲している。



第6図 北陸系住居跡と玉作工房（福田・青木 2018 より転載）



1 ~ 9 : A31 住 12 ~ 17 : B46 住 18 ~ 21 ~ 25 : A1 住 20 : A13 住 他は土師式土器集成

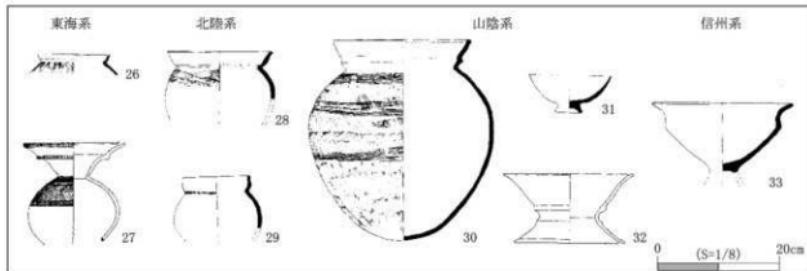
第7図 五領遺跡の外来系土器（1）（福田・青木 2018 より転載）

ただ仔細に見ると胴部の薄さについては、薄さが際立つオリジナルに近い個体と、厚みがある個体が認められる。おそらく刀子等で削り落としていると考えられるが、後者は技術的な到達点には達していないと考えられる。また素材である粘土との差もあるのだろうが、オリジナルの持つ圧倒的

な軽量感はどの個体にも見られない。

ともあれ、模倣の巧拙が存在することは継続的な関係性と、彼の地の人々との交流の多様さと共に強い模倣を志向する意志の存在を物語ると考えられる。

一方北陸、山陰系土器についてはオリジナルと



27・31 : A1 住 他は土師式土器集成

第8図 五箇遺跡の外来系土器（2）（福田・青木 2018 より転載）

の隔たりが大きく、特に山陰系土器の鼓形器台や低脚环は、例えば鼓形器台の接合部や口縁部は全く鋭さを欠いており、形態のみの模倣という印象を強く受ける。北陸系の大型器台は古くに諸學知義が指摘するように関東独自の型式論的変化を遂げており、関東の北陸系土器と言っても過言ではない様相である。北陸西部在来の甕である5の字甕も、前述のように基本的に小型の鉢のみで、オリジナルに見られる稜を作り出す強いナデ等は見られない。

こうした北陸西部系、山陰系土器には、S字甕に見られるような巧拙は見られず、一様に隔たりが感じられる。

北陸地方でも、北陸東北部系の甕、所謂千種甕も一定程度認められる。それらも前述のようにオリジナルとは異なる仕上がりに模倣されている。

しかし、こうした模倣の巧拙や地域ごとの多様な様相が見られるのは、実はごく当然のことなのである。それは在来土器との出土比率を見れば明らかである。

反町遺跡の報告書では古墳時代前期の土器を約4500個体掲載したが、その内外来系土器は211個体である。その占める割合は僅か4.6%に過ぎない。この外来系土器を製作し使用する人々は集落のメンバーのごく僅かなのである。

模倣の巧拙から見れば、こうした外来系土器も、彼の地からの来訪者が自ら作った可能性は低いと考えられる。外来系土器の製作者の大部分は、在来の集落員なのではないだろうか。

しかし、それでも作られるのは、外来系土器のオリジナルに価値があるからであろう。

これまで数回にわたって五箇遺跡出土資料について観察、検討を行ってきたが、その外来系土器は、在来系の土器とは異なる粘土が用いられている。畿内系、北陸系といった系統が異なっていても、区別された同様の粘土が用いられている。それは、五箇遺跡に留まらず、反町遺跡や他の外来系土器が出土する遺跡においても、こうした使い分けが見られる。外来系土器が価値あるものとされていた意識を感じさせるものである。

このことをよく示す事例として、大廟式の大型壺がある。

前述の渡井、栗岡らは大廟式の超大型壺の特殊性を指摘する。極めて特徴的な胎土であるにも関わらず、関東地方で出土するその多くが口縁部の破片であり、転用とする見解もあるが、この破片の使用に拘泥する点からいえば、破片でも価値があった可能性が考えられるとも思えるかいかがであろうか。

駿河以東の、この超大型壺を集成、分析した

柳沼賢治は、破片資料を除いた半完形個体の出土状況の検討から本来の使用目的に迫る（柳沼 2013）。

その中で高坂三番町遺跡の資料についても、山梨県北杜市大日川原遺跡（高田・内藤 2001）と同様に、方形周溝墓群の一画に浅い崖みを設けて正置した例と同様に、方形周溝墓群で用いられたものと推定している（柳沼同 pp.56 ℓ 33-34、pp.57 ℓ 1-3）。

坂戸市中耕遺跡（杉崎 1993）においても墓域に接した土坑状の崖みから、器高 83.8cm の南関東系の超大型壺が、ほぼ正位の状態で出土しており、大廓式の超大型壺に留まらず、当時の大規模な周溝墓群の死者儀礼の一環として同種の土器が用いられた可能性がある。この点については、機会を改めたい。

柳沼は原位置が窺える事例の検討から、その使用用途について以下のような見解を示している。

「大廓型壺が完形あるいは半完形で出土した使用の最終段階を示す例には、方形の低墳丘墓内に納められた壺棺をはじめ、破碎し周溝内に廻棄されたもの、周溝の傍らで行われた葬送に関わる祭祀、水辺の祭祀などがあることを確認した」（柳沼同 pp.58 ℓ 33-37）。

「多様な祭祀行為が行われる際に必要だったもので、特異な大きさからみて、祭祀行為の中で何らかの重要な役割を持った器物だったと考えられる（同 pp.58 ℓ 40-43）。

これは先の栗岡の指摘を更に発展させたもので、外来系土器をどのように在来の人間が捉えていたのかを示す好例である。同様の捉え方は、例えば北陸系の大型器台が集中して儀礼行為に用いられた寄居町野中遺跡（宮井 2011）に見られるように、外来系土器全体に及ぶ可能性があり、その意味でも栗岡、柳沼の所見は傾聴に値する。

また外来系土器の出土を、人の移住と直接結びつける見解も古くからあるが、栗岡や、上野祥史

が三角縁神獸鏡シンポで指摘するように、直接的な人の往来を問題とするのであれば、むしろ葬類の移動こそが問題とされるべきである。しかし、栗岡が言うように、その移動や模倣の様相は超大型壺ほど明瞭でなく、未だ明らかではない。

こうした外来系土器の彼の地のオリジナルとの隔たりのある模倣については、筆者の古くからの課題である。その出土の意義が、このような象徴的な意味合いを持つものである可能性も今後視野に入れるべきであろう。

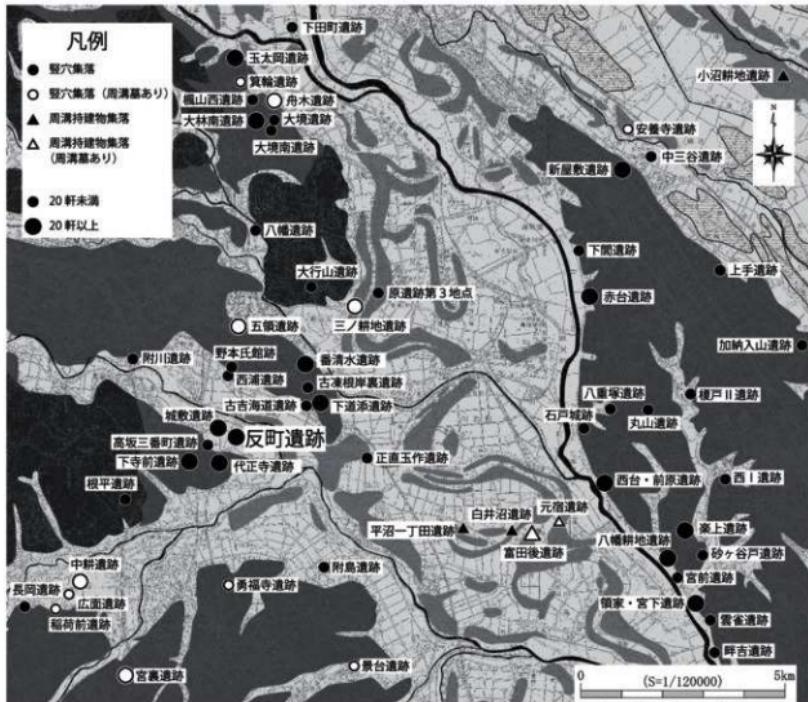
これまで比企地域においては、再三五領遺跡の布留甕に代表される畿内系土器が注目されてきたが、前述のように、反町遺跡においては現状では布留甕がなく、タタキ甕が認められるのみである。五領遺跡の布留甕を比企地域における畿内系土器を代表するものとはできない。かつて述べたように、同じ畿内でも異なるチャンネルの存在が窺える。そうした選択的な取り込み方からも、外来系についての在来社会による主体性が想定される。

また三角縁神獸鏡シンポで、上野祥史が指摘するように、各々の地域の特定の器種の土器が見られる様相は、前述のようにその地域との、その器種を用いて行われる儀礼行為の存在などの特定の関係性を示すものとして重要である。

つまり、外来系土器の存在は、単に外来系集団が自由に在来社会に侵入できたわけではなく、双方が関係性を築きながら「交流」した結果なのである。そして、そのオリジナルの持つ象徴性故に様々なレベルでの、具体的な模倣が行われたと考えられる。

こうした外来系土器の様相については詳しくは別に述べたいが、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡をはじめとする荒川低地や、東京都北区豊島馬場遺跡などの東京低地、羽生市屋敷裏遺跡などの中川低地や、本庄・児玉地域、大宮台地西部の各遺跡など北武蔵全体にみられる。

栗岡が前述の大廓式について取り扱う中で警告



第9図 反町遺跡周辺における古墳時代前期の集落遺跡

するように、外来系土器の取り扱いについては、慎重さと更なる吟味が必要である。

5 集落

関東地方における古墳時代前期は、各時代を通じて最も集落跡が増える時期で、20軒以上の中規模の集落跡が多く見られる。

比企地域でも、本稿で対象とする2・3期の集落跡は少なくない。下道添遺跡、番清水遺跡、五領遺跡、反町遺跡、代正寺遺跡、下寺前遺跡、高坂三番町遺跡、大西遺跡などが知られている(第9図)。

市野川流域の吉見町三ノ耕地遺跡周辺では、豪

族居館の可能性が考えられている大溝が伴う原遺跡（太田 2010）が知られているが、調査が限定的で詳細は不明である。

下道添遺跡（坂野 1987）は、住居跡 18 軒が検出されているが、集落の 2 期後半には終息する。番清水遺跡（金井塚 1968）は 2 期の一辺 13m の大型住居跡、中期にかかる一辺 20m を超える方形周溝墓が存在し、中核的な集落の一つと考えられるが、未報告のため詳細は明らかでない。緑色凝灰岩を用いた大型石製品の製作で知られる川島町正直玉作遺跡（石岡 1980）が近く、両者の関係が注意されるが、現状では評価を保留せざるを得ない。

また、近傍には根岸稻荷神社古墳、下道添2号墓などの前方後方墳の存在も知られているが、1・2期を中心とするものとして次稿での検討対象としたい。

都幾川を挟んだ東松山市野本から高坂にかけては、比企地域で最も集落が密集する箇所である。

都幾川の北側1.5kmにある五領遺跡については、前述のように多くの外來系土器の存在と共に学史にその名を刻む遺跡としてつとに有名である。未報告であるため残念ながら詳細を論じることはできないが現状で140軒余りの住居跡が調査されている（註1）。未調査区も合わせれば200軒を超える集落になるであろう。多系統の外來系土器の出土とともに、畿内系の石錘が出土していることから、首長による儀礼が行われた豪族居館との評価もあるが、その点については現段階では慎重を期すべきではないだろうか（註2）。いずれにせよ、地域を代表する集落遺跡であることは間違いない。

都幾川の南側1.5kmにある反町遺跡は、現状で古墳時代前期の住居跡281軒が調査されている県内屈指の集落遺跡である。破片のみの出土で時期の特定が困難な住居跡も多いが、2期に85軒、3期87軒の住居跡が検出されている。これまで報告書等でも述べてきたように、反町遺跡では40軒余りの大型住居跡を中心とした計画的な造営が見られ、碧玉製、水晶製玉作り工房の存在、土器、木器の製作、多系統の外來系土器の出土、河川の流路を変える堰跡の存在など、五領遺跡と並ぶ地域の中核的な集落である。

反町遺跡の南側の高坂丘陵には、後述する高坂古墳群、諏訪山古墳群などとともに多くの集落遺跡が知られている。区画整理に伴う調査が多く、現状では詳細は不明で弥生時代の住居も含むようだが、代正寺遺跡で230軒、高坂参番町遺跡で148軒、下寺前遺跡で25軒の住居跡が検出されている（註3）。

単純に、野本から高坂の各遺跡の軒数を合計すると540軒余りとなり、古墳時代前期では県内で最も集落が密集している地域と言えよう。その中でも、五領、反町両遺跡がその中心であるのは確実である。

6で述べる古墳群の形成の背景として、これらの集中した集落分布、五領、反町遺跡の存在は充分なものであろう。

県内各所では、2期で収斂する集落が多く、多くても十軒程度の軒数が認められるのみである。特に3期段階は、それまで集落が見られなかつた箇所に10軒足らずの小規模な集落が展開することが知られている。

その中で、反町遺跡や荒川低地の富田後遺跡などは一定程度の規模を保ったまま推移する。

全体としては中核的な集落に収斂し、周辺に小中規模集落が分布するという様相が一般的になっている可能性がある。

この3期の集落の動向と、先の比企地域における集落の密集は「集中と拡散」との評価也可能である。今後関東全体での検討が必要である。

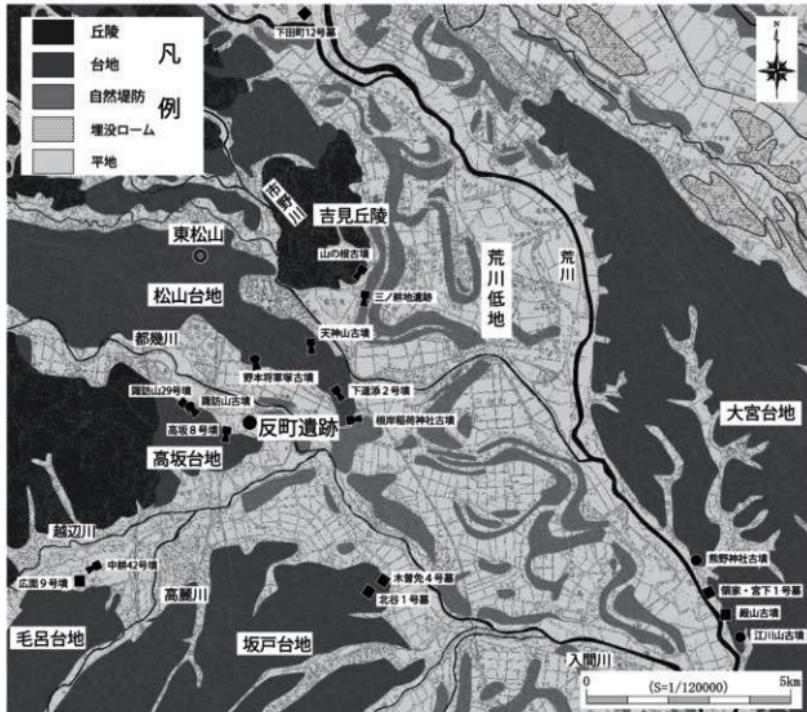
6 前方後方形墳墓と方形周溝墓

(1) 比企地域周辺の状況

前方後方墳と前方後方形墳墓について、反町II-2期からIII期にかけて造られた墳墓を見直す。比企地域周辺の状況については、概要を別稿にて述べたため、ここでは反町遺跡近郊に位置する東松山市高坂古墳群と同市諏訪山古墳群に絞って論を進めたい（福田・青木2018）。

埼玉県下では古墳時代の初めに前方後円墳は認められない。その代わり弥生時代から続いて造られる方形周溝墓とともに、前方後方墳と前方後方形周溝墓の多い点が特徴である（第10図）。

まず反町遺跡では、遺跡全体で弥生時代から古墳時代前期にかけて方形周溝墓が11基確認されている。反町遺跡自体は調査区域外に広大に広が



第10図 比企地域における主要な墳墓の分布

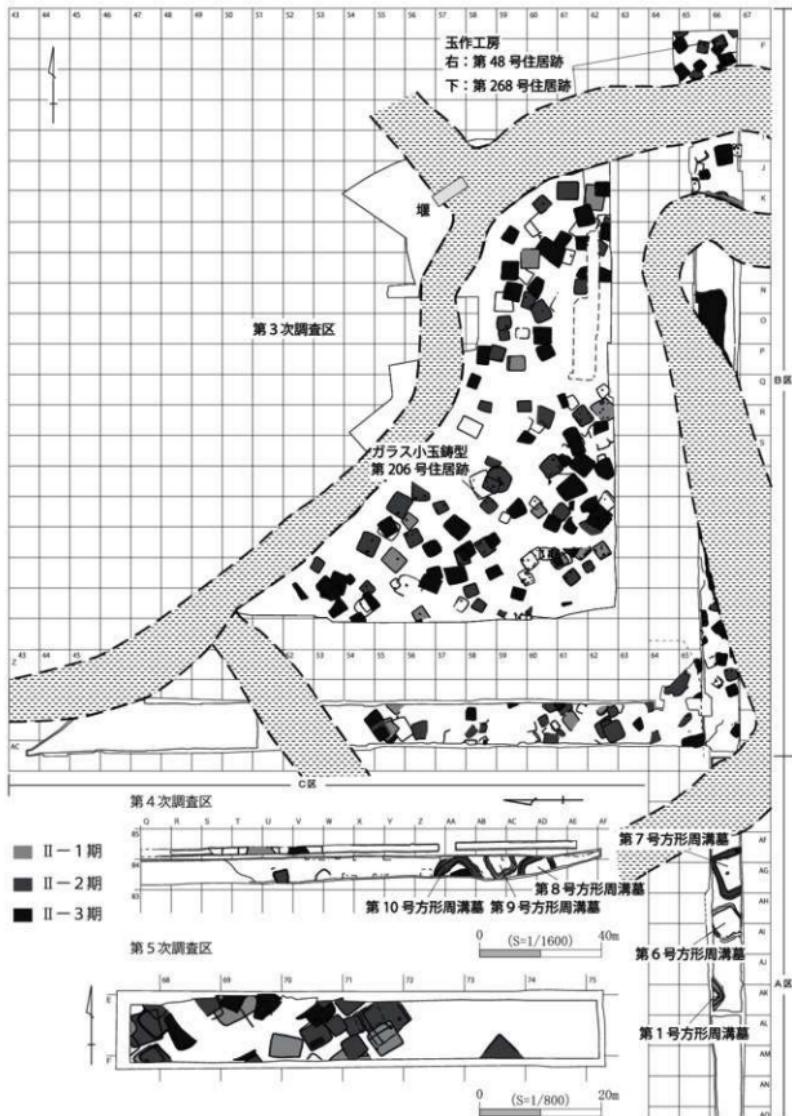
る遺跡のため、実際の基數は更に多いことは間違いない。確認された周溝墓のうち弥生時代は5基、古墳時代前期は6基である（第11図）。前期の周溝墓を見直すと、反町遺跡A区では第1・6・7号周溝墓、D区では第8・9・10号周溝墓がそれぞれ隣接して造られていた。いずれの周溝墓からも埋葬施設は確認されず、周溝内から土器が出土したに留まる。

第1号墓は南西隅周辺のみを確認した。方台部の規模は不明である。周溝は上場幅2.05m～2.84mである。遺物は周溝覆土中から壺片が数点出土したに過ぎない。

第6号墓は方台部約9m、周溝上場幅0.8m～1.6mである。遺物は非常に少なく、この遺構に伴う遺物は出土していない。

第7号墓は方台部が最大11.6m、周溝上場幅1.5m～2.84mである。遺物は単口縁壺や複合口縁壺のほか、畿内系の二重口縁壺や台付壺の破片が数点出土した。

第8号墓は部分的に検出され、方台部は9.2m、周溝上場幅1.7m～2.2mである。遺物は比較的多く、周溝内から二重口縁壺（焼成前穿孔）が3点と複合口縁壺（焼成前穿孔）が1点のほか、小型の複合口縁壺や高环片が出土した。4点の壺



第11図 反町遺跡におけるII期の方形周溝墓と住居跡（福田 2012 を改変）

は器高 30cm 前後の大型壺である。

第 9 号墓は方台部は 7.5m、周溝上場幅 1.3m ~ 2.1m である。遺物は複合口縁壺や小型壺が出士した。

第 10 号墓は部分的に検出された。検出範囲で方台部が 7m、周溝上場幅 2.5m ~ 4.3m と周溝の規模だけをみると大型になるだろう。遺物は複合口縁壺や小型環、台付瓈などが出土した。

また、反町遺跡第 5 次調査区で検出された第 29 号墳は、全体は確認されていないが、墳丘長 14m 以上、周溝幅 3m 以上の方墳と考えられている。周辺の古墳時代前期の住居跡を壊して造られており、古墳時代前期末から中期初頭の築造と推定されている。

反町遺跡周辺に目を転じると、高坂台地では東松山市諏訪山古墳群の諏訪山 29 号墳が墳長約 53m の前方後方墳である。この古墳からは二重口縁壺や台付瓈、小型器台の他に駿河地方の大廓式壺の搬入品が出土した。

諏訪山 29 号墳に隣接する諏訪山古墳は、墳長約 68m の前方後円墳と推定され、これまで造られてきた前方後方墳よりも大型である。

諏訪山古墳群の南東に位置する東松山市高坂古墳群では、第 8 号墳が墳長 20m 以上の前方後方墳とされ、木炭櫛と推定される埋葬施設から捩文鏡や碧玉製管玉、水晶製勾玉、鎧鉢が出土した。なお、この古墳群からは三角縁神獸鏡が表採されている。

上記で扱ったこれらの墳墓は、その位置関係から集落との対応関係も窺われる。

諏訪山古墳群は周辺に集落遺跡は見つかっていないが、台地下に土器が出土した伝承もあり、集落遺跡が存在する可能性もある（註 4）。

高坂古墳群は台地下に反町遺跡が位置し、互いに視認できる指呼の距離にある。高坂第 8 号墳で出土した水晶製勾玉や緑色凝灰岩製の管玉は、反町遺跡の玉作り工房跡（第 48 号住居跡）で製

作したものが供給されたことも推定されており、両遺跡の関係の深さが窺われる（赤熊 2018 ほか）。

このように前方後方墳や前方後方形周溝墓については、各々指呼の距離に集落遺跡の存在が推定される。

（2）古墳出土土器の様相

ここで各墳墓で出土した土器の特徴について改めて確認しておく。

まず反町遺跡の各方形周溝墓から出土した土器については、第 12 図と第 13 図に代表的な土器と反町編年に基づく変遷案を示した。

第 1・6・7 号墓は隣接して造られている。

第 1 号墓から出土した單口縁壺（第 12 図 1）は頸部がしまり、胴部上半はなで肩の古い特徴をもつため、反町編年 II-1 期に位置づけられる。

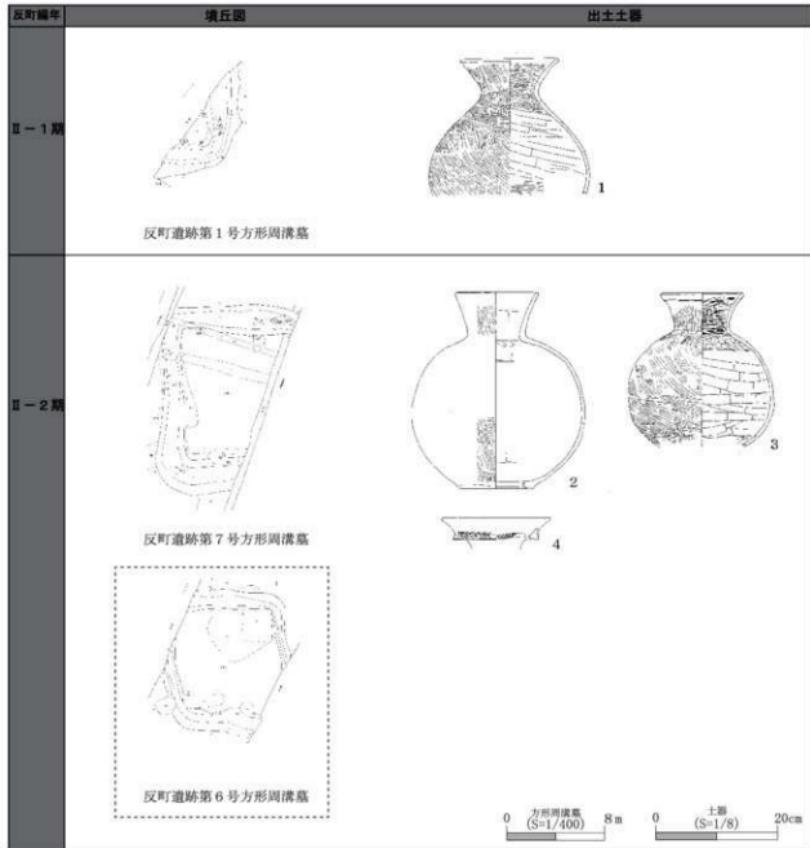
第 7 号墓から出土した單口縁壺と複合口縁壺（第 12 図 2・3）は、1 に対して頸部が立ち、胴部は球形とやや新しい特徴をもつことから、反町編年 II-2 期に位置づけられる。

第 6 号墓は出土遺物がなく、詳細な位置づけができないが、第 1・7 号墓に隣接して造られていることから、反町編年 II-1・2 期の築造と推定しておきたい。

次に D 区で検出された第 8 ~ 10 号墓から出土した主要な土器を見直す。

第 8 号墓から出土した二重口縁壺 3 点（第 13 図 3・4・6）と複合口縁壺 1 点（第 13 図 5）は、いずれも胴部が球形か肩が張る器形である。二重口縁壺の頸部は短く、口縁部は大きく外反する。底部は 3 や 5 のようにやや突出する形と、4 と 6 のようになだらかに底面にいたる形が認められる。これらの特徴から反町編年 II-2 期に位置づけられる。

一方、第 9 号墓から出土した複合口縁壺（第 13 図 1・2）は頸部がしまり、胴部上半部がなで肩をなすといった第 1 号墓と似た特徴をもつ。



第12図 反町遺跡第1・7号方形周溝墓の土器の変遷

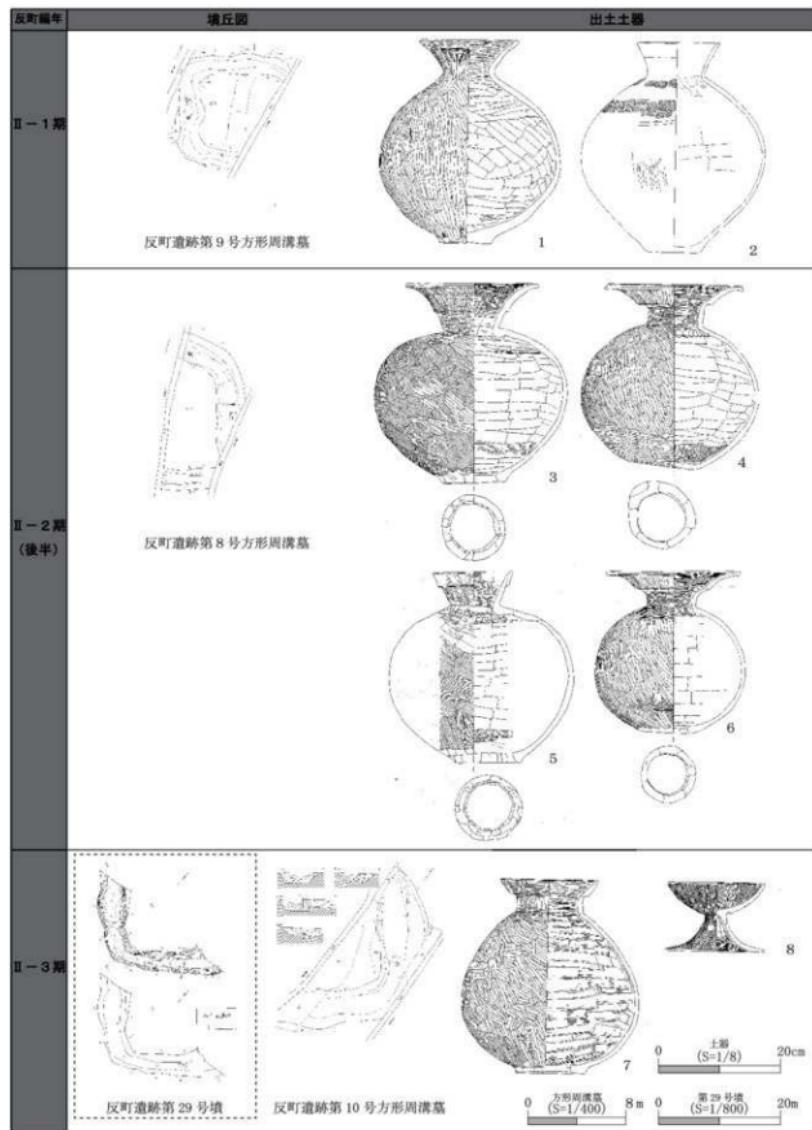
これらから反町編年II-1期に位置づけられる。第10号墓から出土した複合口縁壺(第13図7)は頸部が直立し、口縁部は短く開き、胸部最大径が下半部にある下膨れの器形である。こうした特徴は第8号墓に比べて新しい特徴であることから、反町編年II-3期に位置づけられる。

以上のように、反町遺跡で検出された方形周溝墓は、わずか6基ではあるが、反町編年II-1

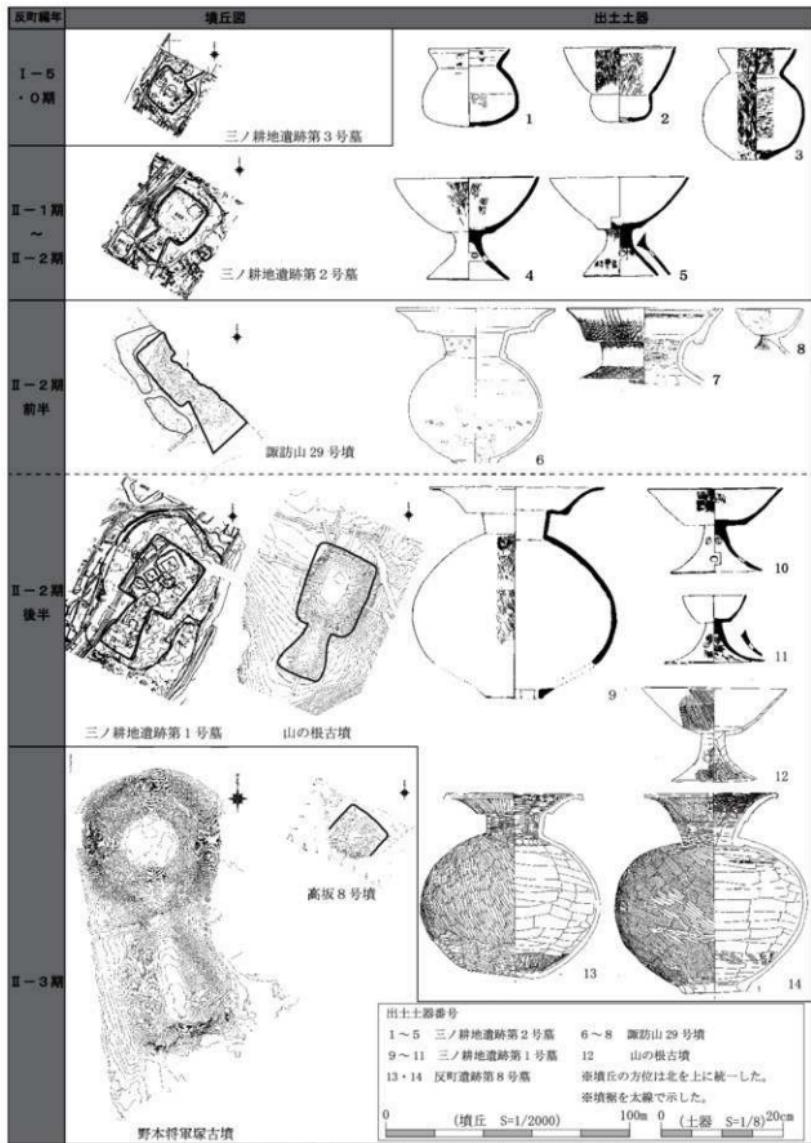
期からII-3期にかけて累代的に営まれたことが窺われる。

諫訪山29号墳出土土器については前稿でも第14図をもとにその位置づけを行った(福田・青木2018)。本稿では本図に基づき、改めて諫訪山29号墳の土器について見直す。

諫訪山29号墳から出土した土器のうち、二重口縁壺(第14図6)は口縁部は大きく外反し、



第13図 反町遺跡第8・9・10号方形周溝墓の土器の変遷



第14図 出出土器からみた墳墓の変遷（福田・青木 2018 を改変）

口唇部は面取りをしている。頸部のしまりは弱く、胸部上半はなで肩で張らない。胸部最大径はやや下方にあるが、全体的に球形である。底部は焼成前穿孔で、接地面をしっかりと形成している。反町遺跡第8号墓出土土器との比較から、時期は反町II-2期前半に位置づけられる。

大廓式壺（第14図7）は口縁部の器厚が比較的薄く外反する。大廓式壺に特徴的な口唇部内部のタガ状粘土紐は薄い。そして口縁部の装飾は、粘土紐による棒状浮文ではなく沈線による施文が行われ、口縁部の造作が全体的に形骸化している。

なお、東松山市埋蔵文化財センターで本例を資料調査した際に、参考資料として東松山市高坂二番町遺跡と同市三番町遺跡から出土した大廓式の大型壺を観察したところ、口縁部は重厚なつくりで、複合部が直立し、粘土紐による棒状浮文を貼付しており、諏訪山29号墳例と比較すると古相の特徴をもつ。

（3）墳墓の変遷

以上の墳墓出土土器について、反町遺跡の編年に基づいて墳墓の変遷を見直してきた。この編年の年代についてはII-2期（4世紀前半）、II-3期（4世紀後半）とする。

反町編年II-2期以降に注目すると、まず反町II-2期前半は前方後方墳である諏訪山29号墳が該当する。

反町II-2期後半は反町遺跡では第8号方形周溝墓が該当する。

高坂第8号墳は出土遺物の全体が明らかでないが、現場での所見ではII-3期と考えられる。ただし、高坂第8号墳は墳丘全体が検出されておらず、前方後方墳として位置づけられるかは更なる検討が必要である。

なお、野本將軍塚古墳については、本墳採集土器やこれらの墳墓の変遷に基づき、反町II-3期以降の築造と推定した（福田・青木2018）。

このように比企地域では前方後方墳（前方後方

形周溝墓）が始めに造られる。こうした状況を踏まえると、前方後方墳の諏訪山古墳（墳長約68m）、および地域は異なるが川口市新郷古墳群の高稲荷古墳（墳長約75m）などはこれに遅れて登場したと推定される。

反町遺跡の近郊に位置する野本將軍塚古墳も同様の流れの中で捉えると、反町II-3期における前方後方墳や前方後方形周溝墓から前方後円墳への転換という画期が認められる。

7まとめ

以上、比企地域を中心に古墳時代前期後半における画期について検討した。本章ではここまで論点を整理するとともに、今後の課題を挙げる。

2~4では比企地域における2期後半の型式論的画期とその前後の土器群の変遷、反町・五領両遺跡における外来系土器の相似、相違の様相といった土器に見られる特徴的な様相を検討した。

5では2・3期における集落の様相を整理し、2期には集落の拡大と集中、3期には限られた集落への集中と、小規模集落の拡散を確認した。

6では墳墓を検討し、諏訪山古墳群では2期に同一墓群内における東海系の前方後方墳から畿内系の前方後円墳への変遷が確認される（註5）。

また、3期においては大型前方後円墳である野本將軍塚古墳、捩文鏡が出土する高坂8号墳が築造され、その系列がその後途絶える点を確認した。

このように比企地域を中心とする北武藏では2期後半に土器型式の画期が認められ、3期にはそれに基づいて土器群全体の様相が転換している。それに合わせて、畿内系の古墳が展開するようになる。この土器の画期と畿内系墳墓への変遷、その後の途絶という対応関係は、6で述べたように一重に東松山に留まらない北武藏における一つの形と考えられる。

この対応関係については、既に若狭徹によって

「低地開発の一つの形」として取り上げられている（若狭 2017・2018）。そこで挙げられた各要素の共通性については大いに賛同できるところである。

しかし、それを実現した社会の形については若狭の想定と筆者らの想定は全く正反対である。

これまで述べたように、筆者らはこうした土器群の画期や外來系土器の様相、古墳の転換は在来の社会が自らを変容させつつ、主導して行ってきたと考えている（註 6）。一方、若狭はかねてから低地開発技術を伴う外來集団のもとに、先のような土器、集落、古墳の対応関係が築かれたとする立場である（註 7）。

この評価の相違は、北武藏、上毛野双方の地元の資料の検討から導かれたものであり、單にどちらかが正しいという問題ではない。例えば北陸系土器の展開、その果たしたであろう役割一つをとっても両地域では異なる。両者の相同を見極め、今後大いに議論すべきものと考えている。

いずれにせよ、三角縁神獸鏡シンボ、野本將軍塚シンボ等を通じて、2期、3期における画期の存在について様々な論点が挙げられており、古墳時代前期の地域社会の実体に迫りつつある。本稿もその一助となればと考えている。

また、検討中であるため今回は取り扱わなかつた、その前段階である古墳時代初頭の検討は、こうした古墳時代の地域社会形成における時代転換の実像を示すものになると考えられる。本稿との対応とともに、これまで述べてきた論点との是非もそこで改めて問われるであろう。

次稿では、比企地域を中心に古墳時代前期初頭、前半について検討する。

なお、本稿は 2～5 を福田が、6 を青木が執筆し、1 と 7 は両者協議の上、福田が執筆した。

本稿は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成 A 「埼玉県における古墳の出現と古墳時代の成立

について」の成果の一部である。

謝辞

本稿を作成するにあたり、以下の方々、機関にお世話になりました。ご芳名を記し、感謝いたします（敬称略、50 音順）。

近江哲 太田賢一 金井塚良一 北井利幸 忽那恵三 坂本和俊 佐藤幸恵 城倉正祥 中島利治 野中仁 水野敏典 宮島秀夫 持田大輔 矢口翔馬 弓明義 若狭徹

櫛原考古学研究所附属博物館 さきたま史跡の博物館 東松山市教育委員会 明治大学博物館 吉見町教育委員会

註 1 五領遺跡の調査軒数については、矢口翔馬氏に御教示頂いた。同遺跡については、現在東松山市教育委員会で整理が進められている。

註 2 腕輪形石製品については、熊谷市（旧大里町）下田町遺跡でも、住居跡からの出土が認められる。しかし、それをもって首長による祭祀行為の存在という評価は間われない。その是非については検討が必要である。

註 3 各々の遺跡の調査軒数については、矢口氏に御教示頂いた。

註 4 金井塚良一氏御教示

註 5 この諏訪山古墳群の様相は、群馬県や茨城県においても同様の様相が認められ、今後、注意すべき点である（滝沢 2018、若狭 2018）。

註 6 福田 2014 で述べたように、比企地域では古墳時代前期には弥生時代から継続する自律性の高い分節集団が主体となり、外來系の各要素の取捨選択を行ってきたと考えられる。その社会が野本將軍塚古墳のような畿内系古墳の築造によって、折り目を迎える可能性が高い。別に述べるが、こうした弥生時代以来の集団の在り方を変えるのに、こうした古墳の築造は絶大な効果があったと考えられる。

註 7 若狭による上毛地域の外來系土器、低地開発に

関する見解には学ぶべき点が多い。しかし、その主導的な役割を外来集団のみが担ったとする評価は、少なくとも北武藏においては無理があると考えられる。氏の最近の論考では、在来集

団との関係性も重視する方向性にやや軌道修正されつつあるようにも感じられる。今後議論を深めていきたい。

引用文献

- 青木勘時 2006「大和地域」『古式土師器の年代学』 pp.87-122 大阪府文化財センター
- 赤熊浩一 2018「埼玉県における古墳時代前期の玉作り」『研究紀要』第32号 pp.33-44
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一ほか 2011『反町遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集
- 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』 pp.84-103 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
- 石坂敏郎ほか 1984『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会 第一法規
- 石坂俊郎 2005「五領遺跡出土土器の今昔」埼玉県立歴史資料館所蔵資料の紹介を兼ねて—』
『埼玉県立歴史資料館研究紀要』27 pp.57-72 埼玉県立歴史資料館
- 石坂俊郎 2005「埼玉県の出現期古墳—そして三ノ耕地遺跡—」『東日本における古墳の出現』 pp.245-250 六一書房
- 石田憲雄 1980「北武藏の玉造遺跡」『研究紀要』第2号 pp.41-74 埼玉県立歴史資料館
- 大村 直 2006「南岩崎遺跡の変遷と市原市域の遺跡群」『南岩崎遺跡』 pp.231-261
市原市埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 大村 直 2009「南中台遺跡・荒久遺跡A地点」市原市埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 書上元博 1986「古墳時代前期の土器群について」『新屋敷遺跡C区』 pp.415-419
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集
- 加藤修司 2000「土器編年案」『研究紀要』21 pp.13-42 千葉県文化財センター
- 加藤修司 2004「草刈遺跡出土土器編年の検証」『研究紀要』4 pp.87-112 印旛郡市文化財センター
- 金井塙良一ほか 1968『番清水遺跡調査概報』埼玉県遺跡調査会報告第1集
- 栗岡 潤 2007『白井沼遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第328集
- 栗岡 潤 2011「荒川流域出土の大席式土器について」『研究紀要』25 pp.123-138 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒澤 浩 2004「五領遺跡出土土器の再検討に向けて」『明治大学博物館研究報告』9 pp.1-20 明治大学博物館
- 小阪延仁 2014「埼玉県の様相」『東生』第3号 pp.93-112 東日本古墳确立期土器検討会
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編 2015「見えてきた! 古墳時代の幕開け—東松山市反町遺跡を中心に—』
- 坂本和俊・金子彰男 1986「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 坂本和俊 2015「基調講演3 集落遺跡が語る東松山の3~4世紀の社会」『三角縁神獣鏡と3~4世紀の東松山』
東松山市教育委員会
- 坂本和俊 2017「集落遺跡が語る3~4世紀の東松山」『三角縁神獣鏡と3~4世紀の東松山』 pp.67-85
六一書房
- 佐藤幸恵 2012「東松山市高坂古墳群の調査」『第45回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会・埼玉県
埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 城倉正祥ほか 2017「墳丘の非破壊調査研究—埼玉県東松山市野本将軍塚古墳の三次元測量・GPR調査—」
『デジタル技術を用いた古墳の非破壊調査研究』 pp.3-36 早稲田大学東アジア都城・
シルクロード考古学研究所・早稲田大学文 学部考古学コース
- 城倉正祥編 2018『野本将軍塚古墳と東国の前期古墳』 早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学
研究所研究論集第1冊
- 吹田直子 2006「山城地域」『古式土師器の年代学』 pp.67-86 大阪府文化財センター

- 杉崎茂樹 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
- 杉本厚典 2006『河内地域』『古式土師器の年代学』 pp.123-144 大阪府文化財センター
- 鈴木孝之 2011『富田後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第385集
- 高田賢治・内藤かおり 2001『第日川原遺跡』明野村文化財調査報告13
- 滝沢 誠 2018『霞ヶ浦沿岸とその周辺の前期古墳』『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』 pp.157-170
早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- 田嶋明人 1986『漆町遺跡出土土器の編年的考察』『漆町遺跡Ⅰ』 石川県教育委員会
- 田嶋明人 2009『古墳確立期土器の広域編年(その1)』『石川県埋蔵文化財情報』20 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009『古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その2)』『石川県埋蔵文化財情報』21
石川県埋蔵文化財センター
- 立花 実 1992『東日本の届曲口縁鉢』『西相模考古』創刊号 pp.2-37 西相模考古学研究会
- 土井翔平 2014『古墳出現期の群馬県域におけるいわゆる折衷型二重口縁壺の展開』『考古学集刊』第10号 pp.23-45 明治大学考古学研究室
- 土井翔平 2015『東日本における古墳出現期の二重口縁壺製作技法に関する一考察』『考古学集刊』第11号 pp.59-77 明治大学考古学研究室
- 西村 歩 2008『中河内地域の古式土師器研究と諸問題』『邪馬台国時代の相模・河内・和泉と大和』 pp.1-42
香芝市二上山博物館
- 西村 歩・池峯龍彦 2006『和泉地域』『古式土師器の年代学』 pp.145-176 大阪府文化財センター
- 坂野和信 1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
- 東松山市教育委員会編 2017『三角縁神獣鏡と3~4世紀の東松山』 六一書房
- 福田 聖 2012『反町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第393集
- 福田 聖 2017『土師器にみる広域交渉と謎の須恵器:古墳時代』『国境の集落』 pp.7-12
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖・赤熊浩一 2009『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集
- 福田 聖・青木 弘 2018『比企の前方後方墳と集落出土土器』『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』 pp.59-75
- 古谷紀之 2014『東京都・神奈川県の様相—複合口縁壺と二重口縁壺—』『東生』第3号 pp.137-164
東日本古墳確立期土器検討会
- 宮井英一 2011『野中・櫻ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書377集
- 諸墨知義 1986『有透穴器台出土地名表』『うつわ』創刊号 pp.21-36 國學院大學第II部考古学研究会
- 柳沼賢治 2013『大廓式土器の広がり—駿河以東について—』『駿河における前期古墳の再検討—高尾山古墳の評価
と位置づけ目指して—』 pp.49-69 静岡県考古学会
- 若狭 敏 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
- 若狭 敏 2018『古墳時代前期の地域開発と古墳の被葬者増—上毛野と北武藏の比較を通じて—』『野本將軍塚
古墳と東国の前期古墳』 pp.117-130
- 若狭 敏・深澤敦仁 2005『北関東西部における古墳出現期の社会』『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』
pp.221-234 新潟県考古学会
- 渡井英誓 1998『大廓式土器小考—大廓式土器の画期とその展開—』『庄内式土器研究XVI』 pp.39-58
庄内式 器研究会
- 渡井英誓・竹内順一 1999『大廓式と呼ばれる大型壺』『静岡県考古学研究31』 pp.45-59 静岡県考古学会

研究紀要 第33号

2019

平成31年3月15日 印刷

平成31年3月20日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社